

秋田雨雀日記

第一卷

尾崎宏次編

未来社刊

秋 田 雨 雀 日 記 第 1 巻

1965年3月30日

第 1 刷発行

定価 1,800円

編 者 尾 崎 宏 次

発行者 西 谷 能 雄

株式会社 未 来 社

東京都文京区小石川3の7

振替東京87385 電話(812)0454

本文製版/山洋印刷 本文印刷/萩原印刷

装本印刷・口絵/形成社 製本/今泉誠文社

乱丁・落丁本はおとりかえます ©秋田いく Iku Akita

刊行のことば

全四巻が完結すると、四百字詰め原稿用紙で六千枚をこす分量になると思うが、その出版を未来社がひきうけてくれたことは、私にとっては特にうれしい。先生が歿してからもうすぐ三年になるが、そのあいだ、私はじぶんの部屋にあずかっている四十七冊の日記を毎日ながめつつづけていた。雨雀日記なら出版してもいいという話が二、三あったけれども、六千枚ぐらいだという立ち消えになった。その条件が容れられて、いまようやく第一巻ができたのであるが、さらにつづけて残りの日記を整理して、死の四カ月前まで書きつづけられた約半世紀の記録を本にしあげる責任を、いま感じている。

雨雀日記の編集をするようになったのは、私の運命だろうと思っている。というのは、兄の義一（筆名・上田進）が雨雀の娘千代子と結婚したので、秋田家とは親戚になったのであるが、兄たち夫婦ははやく世を去ってしまったので、先生のまわりには、そういう親戚関係のなかにだれものを書くような人がいなくなっていたからである。

もっとも、私がこれだけの分量を書きつづけてきた日記について先生から直接話をきいたのは、八、九年前のことだった。板橋の家へ移る直前ぐらいだったかと思うが、ある日訪ねていくと、「私の財産はこれだけです……」といって、ぼろぼろになった古日記をみせられた。私はそのとき、どうしてこんなに根気よくつけられたのですか、ときいた。遅筆家であったことは知っていたので、この克明さはちょっと不思議であった。そのとききいた話では、芝居の世界へはいってからはわずらわしい人間関係にとらわれて、とてもものを書く気持になれなくなっていったこと、

しかし、自分はずっと詩人として出発したので、その情熱は失っていなかったから、それを結局、日記を書くというもののなかにそそいだ、というようなことを話してくれた。

雨雀が世を去ったのは一九六二年（昭和三十七年）五月十二日であるが、その年の一月二十一日で日記は終わっている。ずっと寝たままでいたが、死の四カ月まえに、もうペンを手にするだけの肉体的な力がなくなっていたのであろう。

私は、先生が亡くなる二週間まえの四月二十九日に、急に板橋の家へよばれた。部屋へ入るなり、きょう、どうしてもこの日記を全部あなたの家へ持って行って下さい、保管をたのみます、と言われた。病状が絶望的であることを医者から耳うちされていたから、私はひどく予感のようなものを感じた。いつでもいいじゃありませんか、とにかく日記の保管は私が引き取ります、という、珍しく少しふきげんになって、もしもここが火事になったらどうしますか、私はこのひと（と夫人を指して）を背負ってにげるのが精いっぱいです、どうしてこれだけの日記を完全に持ちだせますか、と言った。

私はすぐ承知した。夫人に眼で合図をして、四十七冊の日記をふろしきに包み、その日のうちに自動車で家へはこんだ。それからの二週間ばかりを、私はいいようのない不安のうちにすごした。死の予感というようないかたをしなくてもいいものかどうか、わからない。が、そのときにかくそういうことで日記をあずかった。

雨雀日記は大正四年二月からはじまって、ほとんど全部が当用日記につけられている。その例外は、一九四四年（昭和十九年）と四五年（昭和二十年）のふんで、前者は小さな手帳ふうの日記だが、後者は原稿用紙やいろんな用紙をとじこんだものにつけられていて、戦争の末期がしのばれた。非常に惜しいのは一九三九年（昭和十四年）の日記がないのと、その翌年のふんが秋ごろまで空白であることだが、一九四〇年の日記には、その空白の部分は日記を警

視庁に没収されたと書いてあるから、一九三九年のぶんも全然戻ってこなかったようである。これは一九四〇年八月十九日に新劇が弾圧されて、新協劇団と新築地劇団がつぶされた、あの事件のときに持っていかれてしまったものにちがいない。鳴海完造氏は、雨雀が生前にそういつていたと教えてくれた。

日記の整理は、一応、四巻で六千余枚という目標をつくって、はじめた。そのため、ある程度のカットは編集上やむをえなかったが、できる限り、私事にわたることで重複したようなところを省略した程度である。もとの日記は、未亡人とも相談の上でこの刊行が終ったら近代文学館におくことにした。それをみていただくとわかるが、カットしたところは赤い×印を目付の下につけてある。筆写するときの必要もかんがえて、そういうふうにした。

生前に「雨雀自伝」（昭和二十八年刊）をだすとき、先生はこれらの日記をもとにして原稿を書いた。そこで、「雨雀日記」にこまかい註をくわえることは差しひかえて、それよりも各頁の欄外にかきこまれているような文字をできるかぎり収録することのほうに編集の重点をおいた。エスペランティストであつたので、文中にエスペラントのでてくることも多く、全体にわたって、門弟であつた佐々木孝丸氏にも目をとおしてもらって、註を最少限にしていた。また第二巻に収められる一九二七年から二八年にかけての滞ソ日記は全文を一頁のカットもなくいれて、鳴海完造氏に註のアドヴァイスをおねがいした。多忙な両氏の御助力をえたことについては、編集者としてとくに感謝の意をしるしておきたい。

なお、

伊東三郎、神近市子、菅忠道、佐々木孝丸、佐藤誠也、薄田研二、千田是也、滝沢修、塚原健二郎、中野重治、浜村米蔵、原彪、久板栄二郎、鳴海完造、藤森成吉、水谷八重子、村山知義、山本安英、山室静

の方々に「秋田雨雀日記」四巻の推薦者になっていただいたので、刊行の機をはやめることができた。雨雀日記の足どりは、エスベラント、児童文学、思想問題、新劇などの多方面にわたっているのです、生前の雨雀を知るかたがたの御支援をえられたことはありがたかった。

未亡人いくさんは近藤晴彦氏のお世話で一九六二年二月二十二日に病臥中の雨雀と結婚した。未亡人にかわってひとこと記しておくが、雨雀の遺骨は豊島区雑司ヶ谷の本納寺におさめられた。一九六四年五月十二日に、本納寺住職兜木正亨さんの書で「雨雀の墓」と自然石にきざんだ小さな墓碑を同寺内につくった。郷里の黒石市二カ所にも分骨された。ひとつは黒森山の歌碑のなかに、ひとつは同市山形町法眼寺にある秋田家代々の墓におさめられた。

とにかく雨雀没後三年目になろうというところで、日記の第一巻（大正四年から大正十五年まで）がでる運びになって、ほっとした気持とうれしい気持とがいりまじっているような感じである。「いますぐ君の家へ持って行ってください」と言われたあの三年前の日のことを思いだしながら、私はこの刊行を地下の雨雀に報告できるよろこびをもった。

仮名ずかいは現代仮名ずかいになおした。先生は、万一出版するときにはそうしていいと言って、仮名ずかい、漢字制限などについては明治時代のデモクラットのほうが進歩的だった、と笑っていた。

やっと四分の一の仕事を終えたばかりである。まだ、あと三十六年間の日記が本棚のなかに待っている。

一九六五年三月 編集者としてしるす

尾崎 宏 次

目次

刊行のことば	一
一九一五年(大正四)年	九
一九一六年(大正五)年	四〇
一九一七年(大正六)年	四四
一九一八年(大正七)年	二六
一九一九年(大正八)年	二六
一九二〇年(大正九)年	二六
一九二一年(大正一〇)年	二五
一九二二年(大正一一)年	三七
一九二三年(大正一二)年	三三
一九二四年(大正一三)年	三六
一九二五年(大正一四)年	三〇
一九二六年(大正一五)年	四〇
註	四四

凡 例

一、本書は、一九一五（大正四）年から一九六二（昭和三七）年に至る四七年間の秋田雨雀の日記を、若干部分の割愛をほどこしたのみで全四巻に年代を追って収録したものである。

一、収録にあたっては、故人の意志を尊重してすべてを現代仮名遣いにあらため読者の便をはかった。明らかに誤記と思われるものの訂正のほかはすべて原文に従い、無用の補筆・削除はおこなっていない。

一、日記中の長文のロシア語、エスベラント語の記録は、必要と思われる以外はこれを除き、欄外の心覚え、メモ等は、（……）内に入れてほとんどを収録してある。

一、日付の下に★印は、その日付中の記録に編者の註があることを示し、それらは巻末に一括整理してある。但し註は、煩雑さを避け、必要最少限にとどめてある。

一、本書刊行の趣旨については、巻頭の「刊行のことば」を参照されたい。尚、最終巻に「秋田雨雀年譜」を付し、その生涯・著作活動等をあとづけたい。

一九六五年三月

編 者 尾 崎 宏 次

秋田雨雀日記 第一卷

一九二五（大正四）年～一九二六（大正一五）年

一九一五(大正四)年

(大正四年一月博文館から贈らる。余は大正三年十一月に東京を立つて大正四年二月帰京した。新時代劇一行には仙台で別れた。初めて人間的、社会的自覚を得た年。演劇上の失敗。父の事件。エロシエンコとの交遊。)

(日記の前に)

父の裁判事件

父の事件というのは、ある婦人が日露戦争で夫を失い、寡婦生活をしていたが、後、妊娠して、産児調節の必要から父が依頼を受け、調節の仕事に従事したが、それが告発され、婦人が逮捕され、それが父の勧告によるものだといったのが父の取調べの原因であった。一説には他の産科医の密告によるものだという説もあった。父の罪状は堕胎殺人罪というのであった。戦争の犯罪といつてもいいもの。外国では犯罪を構成しない性質のものであった。(戦争と犯罪の例)

大塚甲山と鳴海要吉

(この時代は幸徳秋水事件後で、真空時代。思想抑圧時代。——詩

人大塚甲山は取り調べられ、その関係で鳴海うらはる(要吉)は北海道の学校をやめさせられた。エスベラントの手紙なども、不穩文書のように誤解を受けていた。大塚甲山はすぐれた詩人であったが、長い間ジャーナリズムの黙殺を受けていた。僕の「緑の野」はその事件を取り扱ったものだ。——大逆事件後の反動政策。

二月一日★

朝六時仙台の旅館を出発。ほとんど三カ月ぶりで東京に向う。全く別の世界へ入るような気持がした。戯曲「緑の野」着想。

那須野あたりの日光のあたっているさまを描いてみよ。

ようよう新時代劇の一行と別れ得た。解放のよろこび! (日本は去年世界戦争に参加している。)

(去年から北海道、仙台、福島と演劇旅行をつづけた。この日記は二月一日からはじまる——後記)

二月三日

風邪がなおった。仕事をしよう。「あやめ」の主婦来る。払いのこと。晩、岩崎氏を訪い、妻君などと雑談す。佐藤、松岡、倉若君を訪う。みな留守。十日ぶりで入浴。

家庭生活を無視して旅行をつづけたので、家のながめちゃめちゃになっている。

二月四日 雨。寒い。

一日臥床。何事もなすことなし。ひるごろ佐藤青夜君とその友人

来る。仙台、福島、読売、時事、日々に弁解文をだした。(北海道興行のデマに対して)

二月七日

何事もなし。「あやめ」から借金とりにくる。西宮君来る。二人で外出。佐藤君を訪い、晩、楠山(正雄)徳田(秋江)吉井(男)長田幹彦の諸君と神楽坂で飲む。不快な芸者ばかり。夜三時にかえる。くだらぬ芸者!くだらぬ生活!

二月九日

生暖いような、生寒いような、いやなお天気だ。午前を寝通した。読売に六七枚のスケッチを送れ、釧路の人にあてた文章の形で書け。

晩、相馬御風君、橘静二君を訪い、みんな留守。佐藤紅緑の家を訪うたら書生ばかりいた。きみさんはリュウマチで、東海林君らと熱海へ行ったそうだ。

二月十日

午前三上於菟吉君来る。送って出る。監獄署のところで朝鮮の俳優玄哲君にあり、玄の家へいって朝鮮の話をきいた。玄哲は芸術座の研究生で、朝鮮演劇の改革者。

二月十二日

午後まで寝ていた。昨夜はよく眠れなかった。沢田(正二郎)か

ら伊庭孝と上山(草人)の芝居へ出るといつてきた。そんなことはどうでもいいこと!俳優の心理状態はぼくらのと余程ちがう。福島、工藤義公に手紙をだした。沢田はぼくらをすてて北海道から帰っていた。

二月十五日

榎本君の方を解決しなければならぬ。榎本の母さん来る。午後久米正雄君、山本有三君と来る。函館のお春さんのことがでた。午後七時早大大講堂、ベルジュウムの幻燈。ベルジュウム総領事セ・バスタン氏講演。田中穂積氏が紹介、宮島君が通訳した。リージュの町からアントワープ、ガンの町やアルベルト王の肖像、メーテルリンク、ルーヴィンスなどの肖像まであった。いい夜。

二月十六日

榎本清(演出家)が朝帰ってきた。新時代劇の役者は仙台で食えないでいるようだ。晩竹内がきて責任問題で榎本君と争った。興業師も榎本もいけない。

二月十八日

「アルトロ湖畔の人々へ」を執筆中。

雑司ヶ谷清光館の楠田敏郎君から書信があつてロシアの若い盲人ワシリイ・エロシェンコがぼくを訪ねるといつてきた。

(ワシリイ・エロシェンコ(エスベランテスト・平和論者)は清光館に下宿している)

二月二十日★

一日室の掃除をつづけた。押入れの中から死んだ藤堂清子の書信が出てくる。なにかセンチメンタルな気持ちになった。晩、佐藤、倉若、北野君らと入浴。浴後、藤堂の手紙をよむ。藤堂清子は女子大にいたが、文才のある人だった。森田たま、北川千代子の友だち。

二月二十一日

今日午後二時、ワシリイ・エロシェンコ氏がくるはず。二時のはずがワシリイ君の用事で六時に来た。楠田君が案内してきてくれた。

ロシアの盲人、ワシリイ・イヨロノウィッチ・エロシェンコが来た。ワシリイ君は喜んでばくの手を強く握った。彼は小ロシアの人。モスコオで音楽をやった。ヤンコミュージシヤンのことを話した。家はクルシクの地主だ。エスベラントの会員。ばくの作が欲しいといった。夜ワシリイのいた下宿のすぐ前が火事になったので見舞にいったら、ワシリイは寝ていた。

二月二十二日

エスベラントを始めた。

このごろは少し安眠しない。寝飽きているのではないか。午前演劇同志会の前沢未弥君が来た。(松井須磨子の前夫)

島村民蔵君の方へ短い講義を書け。時事新報に三〇分ぐらいのものを書け。

二月二十五日

紀行文「連絡船」を書き始む。今日榎本君のお母さんが来て、榎本君が家へ来ないからとてききに来た。晩竹内のところへ行くと、妻の畠山だけいた。榎本君は大熊と待合にいた。たぶん金のことだろう。玄哲君がきて朝鮮の歌を教えていった。

二月二十六日

「連絡船」脱稿。時事新報に送れ。

晩榎本君がくる。竹内との交渉の一件を話す。女優岩間桜子と竹内の関係話を話して、女は馬鹿なものだという。岩間が竹内にだまされている。

二月二十七日

青山杉作君のところを訪う。馬場孤蝶氏が推せん状に署名してくれといっているそう。青山君の子供は大きくなった。自分はエスベラントをやっている。かなり進歩した。藤堂清子の書簡を整理。処女のセンチメンタリズム！

二月二十八日

晴れたが昼頃くもった。

山田家から借金の催促を受けた。兄貴に手紙を出せ。榎本君、石田君と来る。仙台のことで。興業師竹内は岩間を利用しようとしている。ひどい奴だ！

おひなさまを飾る。子供が喜んでゐる。ちよ子、ローマ字を覚え始む。晩バアで佐藤君、倉若君、北野君と飲む。いやな車夫が入ってきた。

三月一日

静かに確かに歩け！

エスベラントはかなり進んだ。愉快！ 晩方竹内を訪う。読売に土岐哀果君を訪い、金を受取る。仲田勝之助君と共にカフエ・パウリスタへ入った。音楽の人と逢う。帰途竹内により石田君と共に開戸（芝居の衣裳屋）にゆく。留守中に時事の柴田（柴庵）君がきていた。子供入学の手續を了す。

三月三日

いい月だ。

エスベラントと平和運動。平和運動をすすめる！

今日は博文館の写真屋がくるはずのがいくら待ってもこない。文章世界へ脚本の着想中。晩、岩崎夫人と語る。岩崎氏は町の組合の人と一緒に寄席へいったそうだ。夜、佐藤氏のところへ寄り、松田君などにエスベラント学習の必要を説く。

三月四日

文章世界の着想をしてると、竹内から中西君が使いにきたので開戸行き、三人で証文を入れた。

晩、本郷座の真山（青果）君の招待にゆく。

鏡花の「日本橋」六幕であった。喜多村のお孝だけがいい、男はみないけない。

福島の地蔵は、はまり役であった。西徳田、楠山、長田（幹）なぞとあった。久米、山本、木下八百子などもいた。

三月六日

秦豊吉君来る。沢村田之助の伝記をつくるので、吉村繁俊（河竹）君を紹介す。

いいお天気、文章世界着想、どうもまとまらない。午後、共同墓地を散歩、どうも頭が決まらないでいけない。午後、小林直太君訪問、いっしょに榎本君を訪うたけれどもいなかった。送って豊川町郵便局の方まで歩いた。

佐藤君を訪問、留守。入浴。
家からりんごがくる。

三月七日

不快な日だ。午前散歩した。

榎本君来る。竹内と喧嘩したそうだ。

午前、越前翠村君来る。若山君の窮状を話してゆく。若山牧水がひどく困っている。

晩、佐藤君、倉若君に逢う。

夜、脚本「二個の生物」という題で書きはじむ。

三月八日

文章世界かなり進んだ。

文章世界の脚本二十五枚だけできた。

榎本君が来て、興行師竹内に金をださせるように運動してくれと云って来た。

晩、竹内を訪う。竹内居ずに畠山にあい、大体の話をしてくる。

帰途、豊山大学の中村君を訪い、帰って執筆。脚本は明日中にしあげる。

三月九日

午前中竹内きたり、榎本とのことを話していった。私は中へはいって調停させようとも思う。しかし馬鹿らしくも思う。

戯曲「二個の生物」脱稿(三十五枚)。

晩、青山原宿の西村諸山氏のところへゆく。原宿であり、迷っていると若い二人の女が教えてくれた。

西村氏と快談し、原稿を置いて帰った。

三月十二日

今日、竹内が衣装紛失の責任問題でくるはずのがこない。

晩方、榎本君来る。竹内を車で呼びにやる。いないと云う。僕は電話をかけた。

榎本君は余り理智的でいけない。

そして非常に冷酷な点がある。

僕もある意味の覚悟をした。

エスプレントをやる。だんだん進む。

夜、堂前君が来た。

鳴海うらはるが「Akatsuki」というローマ字文学雑誌をやるそうだ。

三月十六日 夜曇る。

「新日本」へ日誌を送れ。

洋服屋開戸の事が切迫してきた。

昨日、小石川の七人ぎりのことが新聞にでた。

夜、青山(杉作)君と散歩してくると、竹内に逢った。望月秀子に逢い、二人で遊びに行つて十時ごろ帰る。

三月十七日

僅かばかりの金でいやな思いをしている。開戸のことで榎本君と竹内を訪う。留守。

榎本君が七円、僕は四円を造る。開戸へ持つてゆくと主人がいな

いといって受取らなかった。

三月十八日

糧のない熊(北海日誌)。

新日本への原稿を書きはじむ。

開戸のことくだらない頭を痛めた。

頭が痛む。十七、八枚書いた。

竹内と開戸の間に衣装代は八十五円になったといってくる。竹内

は自分で責任を負うからという。

三月十九日

今日までに「新日本」へ三四十枚の小説。

今日、北海日誌をほぼ脱稿、東京を出て、小樽、札幌、釧路、帯広、函館までの紀行日誌を書いた。四十枚ぐらいいになった。すべてを脱稿するまでは朝の五時までなかった。

「糧のない熊」朝、原稿を車屋に持たせてやる。

三月二十一日★

興業に關係するな。

中西来訪、富山興行の件をいつてきた。自分は關係しないようにしよう。興業には直接關係せぬこと。小林君来る。

散歩して岡本婦一君を訪い玄君のところへゆき、笹本甲午君に逢う。有楽座から催促がきた。

夜、演技座の「役者の妻」をみる。

京子、孔雀はいい。

三月二十二日

「たぬき」に追悼文を書け。

新時代劇の日匹、初林、静ちゃんは仙台から帰ってきた。

山本有三君くる。武者君の「其妹」を絶賛していった。読んでみよう。遊園地であそぶ。師匠の娘たちがいた。おさらいがあるそうだ。

開戸から薄井昇次郎という男が使いにきた。(芝居衣装の件)
夜、竹内のところへ行く。

武者小路は努力家だ。

三月二十四日

榎本君は一種のエゴイストだ。銚子にいるようだ。竹内のところへ手紙がきていた。

お母さんも知っていないはずはない。

夜、竹内のところへいつて開戸のことを詰問すると、自分で衣装を買って芝居をしたいのだという。

僕と榎本君と二人で処決してしまいたい。

開戸へ申込んで二人の責任を解除したい。

中西の芝居の責任は免れた。

三月二十七日

古川へ三十円の借金のことを頼んだら承知してくれた。手数料一円五十銭に、月三分の利。

明晩もういつべんゆくことにする。

総選挙全部決定、政府側勝利。大隈内閣継続。

三月二十九日

朝来るはずの古川がこない。

屋ごろ古川から妹病気のため金が出来ぬといつてきた。馬鹿馬鹿しいことだ。たった三十円の金のために苦しんでいる。